

子どもの成長と地域の役割

——沖縄・糸満市の事例から——

安 富 俊 雄

はじめに

子どもの成長にとって家庭や学校の役割が大きいことは言うまでもないが、わが国の子どもの歴史を振り返ってみると地域も極めて重要な役割を果たしてきた。子どもは地域のなかで成長してきたといっても過言ではない。（ここでの地域とは近隣の生活共同体、集落などをさす）

しかし、高度経済成長期以来、地域の存在は子どもに関わらず大人にとっても希薄になっているところが多い。つまり、地域はそこに居住する人たちの生活にあまり認知されていないということである。換言すれば、地域が生活共同体としての機能を果たしていないということである。

かつて子どもは生まれて成人する過程で家族や近所の遊び仲間や先輩、大人などの集団に関わるなかで成長してきた。また、子どもの成長には地域独特の歴史や風習、地域組織や伝統行事なども少なからず影響していたであろう。ところが近年に至っては地域の伝統行事が減少し、行事に関わる子どもの姿もほとんど見かけることがなくなった。このような状況では今日、地域が崩壊したといわれてもしかたがないだろう。さらに、地域の存在が不安定になり、子どもを外で安心して遊ばせられない、1人で外出させられないなどの問題まで生起している。子どもが健全に成長していく過程で地域の役割が大きいと考える筆者は、もう一度地域が復活・再生することを願っている。伝統行事はそれを可能にしてくれる有効な手段だと思っている。

近年、祭礼行事調査で沖縄へ出かけることがあるが、沖縄では行くところ行くところ行事のなかに子どもの役割が設けられており、子どもが生き生きとさまざまな伝統行事へ参加をしていることに気付く。当然、行事で役を担うためには大人たちが時間をかけて役づくりに関与していることは明白である。つまり、子どもの地域行事への参加は、子どもと大人の間を自然な型で構築してくれる。本土でも伝統文化を継承するために大人が子どもへ継承指導している地域もないわけではない。しかし、沖縄では、それが全域的にみられることに注目したい。

そこで、かつてのように地域と子どもとの関係を再構築するためには、もう一度地域における伝統行事を通して子どもの育成と地域再生を期待して沖縄県糸満市の現状から、そのヒントを探ってみたい。

1. 今日の子どもの地域との関係

まず、今日の子どものめぐる社会的状況について考えてみたい。といっても子どもをめぐる問

題は多岐にわたっており、ここでは地域との関連に焦点をあて考えてみたい。

かつて、人々は集落を形成し、互いに協力をしながら生活をしてきた。そのなかで、子どもは社会的弱者と見られてきた。同時に、子どもは将来地域を担う存在として一人前になるまで大切に育てられてきた。具体的には、かつての「子ども組」のように地域の組織の一部とされ、ある時は子どもの自主組織として、年中行事など地域伝統行事の一端を担ってきた。そのなかで大人と関わり合い、大人を見ながら大人への指導を受け子ども同士が切磋琢磨し大人へと成長していった。

戦後に至っては、当初子ども会をはじめボーイスカウトやガールスカウトなどの地域奉仕団体の活動が盛んであったが、高度経済成長期以降、その活動は徐々に衰退していった。同時に都市化により青年層の流出が顕著になり、地域の機能が円滑に進行しなくなった。その結果、青年層の減少は伝統行事の継承を困難にするなど、伝統的な地域組織の崩壊をもたらした。このように子どもが地域とのつながりを欠いてきたのは単に子どものせいではない。そのような環境にしてしまった大人の責任、強いては社会の責任であろう。先にも述べたように高度経済成長期はわが国の経済的豊かさを作り出した象徴のように言われている。確かに経済的豊かさは個人的にもゆとりを生み生活の質を転換する端緒となった。同時に個人主義が浸透し、女性の社会進出やこれまでの伝統にとらわれない自由なライフスタイル（たとえば周りの人に迷惑をかけなければ良しとする）が求められるようになる。特に女性の高学歴化や社会進出が顕著になったのもそれを助長しているように思われる。そして、女性の社会進出は共働き家庭の出現を見るようになる。いわゆる共働き社会の到来である。厚生労働省の調査によれば、2012年では女性の60%以上が何らかの仕事を従事しているという¹⁾。こうした状況が子どもの地域活動にも大きな影響を与えている。

というのは先に子ども会活動などの衰退状況を挙げたが、その要因として親が仕事に追われ土・日曜日の活動に参加しなくなるといふ事情が多いことが挙げられる。また、近年では母親不在を理由に降園後・下校後に「習い事」に通う子どもが多くなっていることが挙げられる。そのため、降園後・下校後に近所の子ども同士と一緒に公園で遊ぶといった状況はあまり見られなくなった。さらに地域環境の不安定要因も加わっているため、親が成長期の子どもが屋外で遊ぶことを嫌い、なるだけ自宅で遊ぶことを望んでいる。したがって、今日では子どもは家庭内でゲームを楽しむといった構図ができていく。遊びは子どもの成長に極めて重要とされ、空間・仲間・時間不足が大きな問題となっているが、今日のような環境では子どもの正常な成長は困難であるし、地域とかかわることは極めて困難な状況である。公園などの外遊びの減少は、心身ともに子どもの成長にとって由々しき問題であるし、子どもの体力の低下も付随する大きな問題である。こうした状況は今日の子どものめぐる構造的な問題である。

内閣府国民生活局の「国民生活選好度調査」によれば、近年地域社会では近所づきあいの希薄化が指摘されている²⁾。また文部科学省の「地域の教育力に関する実態調査」によると、アンケートに答えた小・中学校の保護者は自分たちの子ども時代と比べ「地域の教育力」が低下していると答えている³⁾。このような社会状況が続くならば、もはや地域という意識は人びとの意識

からますます希薄になっていくだろうし、生活共同体としての地域の存在、ひいては人と人が助け合う社会そのものが根底から崩れていくのではないかという危惧の念を抱かざるをえない。

以上のように、地域の交流不足（子ども同士、また子どもと大人）が地域の安全を揺るがし、強いては子どもの成長に悪影響を与えることは明白である。

こうした現状を少しでも改善し、子どもらの健全な成長を願うとき、さっ急な対応が必要である。

そこで、今日も多くの伝統行事を継承している沖縄県糸満市の現状を参考にしながら、子どもの成長と地域のあり方を探ってみたい。

2. 糸満市とハーレー行事の紹介

a. 糸満市の概略

まず、糸満市を簡単に紹介する。

糸満市は沖縄本島の最南端に位置する亜熱帯海洋性気候である。西側は東シナ海、東側は太平洋に面している。太平洋戦争時には糸満は地上戦場となった。

14世紀後半の三山（北山、中山、南山）時代に糸満の南山王らが中国（明王朝）に朝貢し、進貢貿易を展開した。以来19世紀中頃まで、統一された琉球王朝時代も中国との交易が盛んに行われ、糸満の漁師たちはその推進役を担ってきた。よって糸満は古くから王朝にも認められた漁業集落として栄えていった。かつて沖縄の「海人（ウミンチュ）」といえは糸満漁師のことをさしていた。また、糸満漁師は漁業技術に長け「追い込み漁」という独特の漁法を考案し、明治期以降、沖縄本島各地はもちろんのこと、宮古・八重山諸島、奄美諸島、本土、遠くは東南アジア、南太平洋の島々まで漁の出稼ぎに出かけた。なかには出かけた地域へ移り住むものも多くいた。このような糸満人を、わが国唯一の海洋民という人たちもいる⁴⁾。その推進役を担ったのが沖縄で考案されたサバニという木造船である。この舟は軽くて転覆してもすぐに元に戻る特性があり、漁舟としても優れた機能を発揮した。

しかしながら、琉球王朝時代以来、沖縄漁業の中心地として栄えた糸満も、漁の不振が続くなか、漁業離れが続き、現在は漁師町としての影を潜めている。人口は、平成25年12月末現在59,851人であるが、専業漁師はわずか200人余りである。また、現在は海上の埋め立てが進み、かつての漁業集落から様相が大きく変わった。糸満市は県都那覇市から12kmのところにあるため、埋め立て地は工場や住宅地に代わり、那覇のベットタウンとして人口微増地域になっている。

b. ハーレー行事

歴史ある糸満市には全国的にも知られている伝統行事が2つある。一つは漁業者を中心として旧5月4日に行われる海神祭（通称・糸満ハーレー）である。もう一つは農業地域を中心として行われる糸満大綱引きである。大綱引きは直径1.5m、長さ180mの綱で、雄綱と雌綱の2本の

綱を絡ませて引き合う。

ここでは糸満ハーレーを取り上げる。四方を海に囲まれた沖縄では長崎同様、全国的にも伝統的舟競漕が盛んな地域である。これらはいずれも中国文化の影響を受けて今日に至っている。起源は、沖縄では中国との交易がはじまった後の15世紀頃から、長崎では17世紀初頭といわれている。名称は、沖縄では一般にサバ二舟による舟漕ぎ競漕を「ハーリー」と呼んで県内各地でおこなわれている。だが、糸満では37年前(昭和52年)から「ハーレー」と呼ぶようになった。今では夏の風物詩的存在になっている。ちなみに、長崎では呼称は「ペーロン」という。ペーロンも7～8月にかけ長崎市周辺の地区で盛んにおこなわれている。

ハーレー行事は旧5月4日、豊漁と航海安全を祈願して沖縄全島で行われているが、その特色は糸満人が出稼ぎなどで移住した地域でも行われていることである。よって、他の地域も競技内容は糸満とよく似ている。よく似ているというよりも糸満を真似たところが多い。

沖縄では伝統行事に老若男女が参加するのが目立つ。ハーレー行事も例外ではない。そして、参加の仕方も単なる客寄せのプログラムを設けるのではなく、神事のなかに子どもの存在・役割が明確に位置づけられていることである。それはハーレーにかぎらず、先にあげた糸満大綱引き、地区エイサーなどにも見ることができる。

このハーレー行事での子ども(小学生)の役割は、競漕舟の乗員の一人(漕ぎ手10人、舵取り1人、そして舟の舳先で調子をとる鉦打ち役の子ども1人の12人が乗る)で大切な役を担当する。子どもとの関連では後で詳しく述べる。

3. 子どもの成長における地域の役割

a. 伝統行事と地域

最初に述べたように、若者の流失や個人主義の浸透は地域の人々の意識構造を変え、地域共同体としての円滑な運営が難しくなっている。かつての活気に満ちた地域を取り戻すために、これまでさまざまな試みがされてきたが、目下地域の円滑な運営は取り戻されておらず、効果が上がっていないようだ。今後も地域内の人々の交流が失われた状態を活気あるものにするのは容易ではない。そんななかで、地域再生の一つの手がかりとして、沖縄のようにその土地、その土地が育み継承してきた伝統行事への積極的な取り組みを行なっているところではそのヒントを与えているように思う。なぜなら、これまで各地の伝統行事(祭礼)の調査に携わってきたが、地方の多くのところでは、これら伝統行事は高齢者中心で実施され、かろうじて継続されている状況である。現状を見ていると消滅の危機を迎えるのは時間の問題である。このような状況になぜ子どもたちに継承しないのかという疑問が残る。子どもが少ないという現実もあるが学校優先の現状や宗教の問題などがあるのかもしれない。しかし、子どもたちは小さい頃から親に連れられ行事に参加しているのである。したがって、その行事をある程度理解しているはずである。世代を超えて一つの伝統に取り組む、参加することは大人も子どもも自然な交流である。子どもらも参加となれば、当然、技を身につけるために練習を重ねる。練習を重ねることによって年齢を越

えた人的交流が行われるようになり、それがやがて地域の再生につながっていくのではと期待する。なぜなら、子どもは交流を通じて大人を尊敬し、尊敬する大人を目標にする。つまり、子どもは交流を通じて社会人としての知識を享受し成長していくのである。今日では、世俗化も進み、伝統継承といった風潮を形成することは困難かもしれない。しかし、地域再生のため、もう一度大人側の奮起と行政の後押しを期待したい。沖縄はその可能性を与えてくれるところだ。

b. ハーレー行事と子どもの関与

さて、ハーレー行事は糸満市最大の年中行事である。長い歴史があるが、今日では漁業者の行事というよりも糸満市の行事に発展した。主催は「糸満ハーレー行事委員会」で、各区の区長、自治会長、漁協役員、商工会議所、学識経験者などで構成され、市全体で支援体制がとられている。漁業者の減少により、漁業者だけの行事ではなくなったが、他の地域で見られるような現代的イベントではない。その証拠に歴史と伝統を背景に旧暦5月4日開催を厳守している。今日では、このような行事はとかく参加人員確保と観光を兼ね、祝日や日曜日開催が多い。しかし、ハーレー行事は昔ながらの形態を重んじ継承している。行事は数日間の厳かな儀式で始まり、本祭翌日の儀式ですべてが終わる。

ハーレー行事は、余興として子どもから大人まで参加できるプログラムで構成されている。また、先にも述べたように小学生は大人の神事レース用の舟の乗員（舳先で漕ぎ手の調子を取る鉦打ち）の1人として乗る。この他、子どもが関わるレースに「中学生ハーレー」がある。これは将来の行事担い手（継承者の養成）のために行われる。

また、本番ではないが行事の前日には小学5年から6年生、中学生を対象に「少年少女ハーレー」が行われている。これにはハーレー行事に関わる3地区（西村・中村・新島）の近くにある糸満小学校、糸満南小学校、西崎小学校、糸満中学校、西崎中学校に糸満ハーレー行事委員会・糸満体育協会より、生徒の行事参加への協力依頼がある。これは本祭に向けた伝統文化継承の一環でもある。行事へ向けて地域の大人たちが指導する姿は微笑ましい。この行事は昨年（平成25年）で22回目を迎えた。

また、上記の小学校ではハーレー行事の儀式で歌う「ハーレー歌」を教えている。そして、小学校のなかにはこの歌のコンテストを行っているところもある。このように地域をあげて伝統行事を支援しているところに敬意を表したい。

さらに、ここで強調したいことは、子どもたちがこの行事への参加にあたり学校が休校になることである。行事に直接参加する子、応援する子様々であるが学校が子どもを伝統行事に積極的に参加させようとする姿勢は見習うべきものが多い。伝統の重さであろうか。しかし、この姿勢はハーレー行事にかぎらない。

では、糸満ハーレー行事委員会と糸満市体育協会の連名で小学校へ出された協力依頼の一文を紹介する。

「……ご承知の通り糸満ハーレーは、先祖代々受け継がれてきた由緒ある行事で、本市を代表する祭典としては県内外に知れ渡っております。……糸満ハーレー行事委員会・糸満市体育協会糸満支部では地域

表1 糸満市域で行われている主な年中行事（祭祀）

月 日 (旧暦)	行 事 名
1月1日	御水撫で（ウビナディー・ミジナディー）
1月2日	初拝み（ハチウガミ）・カー拝み
1月2日	神年頭（カミニントゥー）
1月3日	初畑仕事（ニチバル）・初興し（ハチウクシー）
1月 日	生年祝い（トゥシビー）
1月16日	16日（ジュールクニチー）
2月 日	シマー・シマクサラシ
2月15日	麦穂祭（二月ウチマー）
3月 日	三月ウグワン
3月3日	浜下り（ハマウリ）
3月15日	麦大祭（三月ウチマー）
4月ごろ	清明祭（シーミー）・門中シーミー
4月 日	畦払い（アブシバレー）
4月 日	腰休め（クシユックイ）
5月4日	ハーレー・ハーリー（ユッカヌヒー）
5月15日	稲穂祭（五月ウチマー）
6月15日	稲大祭（六月ウチマー）
6月25日	強飯折目（カシチーウイミ）・カシチー綱
7月7日	七夕（タナバタ）
7月13日	旧盆 ウンケー（御迎え）
7月13日～	旧盆 エイサー
7月14日	旧盆 綱引き
7月15日	旧盆 御送り（ウークイ）
8月 日	屋敷ヌウグワン
8月10日	柴差し（シバサシ）
	ガンゴー、コーンマの祭り、コーヌユエー
8月11日	
8月15日	十五夜（ジュークヤー）
9月9日	9月物参り（九月ムヌメー）・菊酒（チクザキ）
9月29日	嶽々物参り（タキヌメー）
10月	カママーイ
12月8日	鬼餅（ムーチャー）
12月 日	師走の御願（シワーシヌウグワン）
12月 日	ヒーゲーシヌウグワン
12月	チリタンチョウ・キリタンチョウ

（糸満市教育委員会）

文化、伝統行事の継承・発展、後継者育成、青少年の健全育成の観点から今年も……市内小中学校の全面的な御協力をお願いしたく……少年少女ハーレー大会に全校生徒が参加できますように、特段のご配慮をお願いします。」

と記している。こうした協力依頼は、糸満地区だけでなく、糸満市の名城地区・喜屋武地区でも行われている。また、近隣の八重瀬町でも港川ハーレー実行委員会が教育委員会に対し、生徒参加依頼を要請している。

「さて、御承知のように当港川は糸満の分村として200余年の歴史があり、伝統的な諸行事は糸満に順じており、特に漁民の航海安全と豊漁を祈念して行われる港川ハーレーは、糸満に順じ曜日に関係なく毎年旧暦の5月4日（本年は6月12日 水曜日）に盛大に執り行われます。このハーレーは旧具志頭村当時から地域の行事としては最も伝統的な行事として認識し役場をはじめ小学校・中学校の生徒及びさらにPTAの皆様に本行事に参加が恒例となっております。

当漁協といたしましては、八重瀬町の小学校、中学校の生徒を本行事に参加させ地域の伝統行事を継承させてまいりたいと考えております。…」

こうした伝統行事への地域全体としての取り組みは糸満やその周辺にかぎらない。おそらく沖縄全島で行われているものと思われる。表1は糸満市域で行われている主な年中行事（祭祀）であるが、子どもに関する行事が9つある。1月の生年祝い（トッシビー）、4月の清明祭（シーミー）、5月4日のハーレー、6月15日の綱引き（ウチマージナ）、6月25日の強飯折目（カンチーウイミ）、7月13日のエイサー、7月14日の綱引きでの獅子舞、8月15日の十五夜（ジュークチャー）、12月吉日のチリタンチョウ（その年に生まれた赤ちゃんの合同祝い）など。

この年中行事の数を見ても、今日の本土では考えられない数にのぼる。このような年中行事を通して、子どもと大人が一体となって地域連携をとっている沖縄県の現状は、地域の存在を忘れかけた我々にとって地域再生の大きなヒントを与えてくれているのではないかと思う。無言の教育である。もちろんその背景には行政の支援と理解がある。糸満市の小学校の社会科の副読本『私たちの糸満市』（糸満市教育委員会制作）には、ハーレーや大綱引きなどの伝統行事が、わかりやすく解説されている。

このほか、糸満市内には表1以外にも各地区で独自の年中行事がおこなわれている。それには当然子どもたちも参加している。そして、子どもたちには伝統行事を継承しようという息吹を感じる。それは単なる年1回の行事（点の活動）で終ることなく、数々の行事が連動して（点から線）行われており、それが地域内の子どもと大人の間を円滑なものにしているものと思われる。

おわりに

高度経済成長期以降、物質的な豊かさよりも精神的な豊かさが強調されるようになり、「文化」の視点が行政などで重視されるようになった。その意味では、我々が地元の伝統文化や地域を見直すよい機会ではなかろうか。

今さら、伝統文化で地域の再生など困難と考える人も多いただろう。しかし、現実には伝統文化をメインに地域の活性化が図られているところも存在する。こうした地域を参考に活性化が図られれば、地域の再生がおこなわれ、それが個性的な「地域づくり」につながっていくのではないか。同時にそのような地域で育つ子どもたちは健全な成長を遂げるのではないかと期待する。

沖縄は我々が忘れかけた心のよりどころをもう一度想い起こさせ、地域再生の大きな示唆を与えてくれているように思う。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省大臣官房統計情報部資料 2012
 - 2) 内閣府国民生活局「国民生活選好度調査」 2011
 - 3) 文部科学省「地域の教育力に関する実態調査」 2006
 - 4) 中楯興『日本における海洋民の総合研究』上巻 九州大学出版会 1987
- 糸満市役所『糸満市市勢要覧』 2011
- 糸満史編纂委員会『糸満市史 村落資料 旧高嶺村編』 2013
- 糸満市教育委員会『私たちの糸満市』 2011
- 中藤康俊『地域社会の変動と文化』 大学教育出版 2011